

掌編 フエルリイクニングス街十三號

八嶽外史

彼の不思議なる女性と識り合ひしは、此の北歐の街衢が夏の光に横溢せる頃なりき。

余は偶々縁有りて、此の街衢に會て住ひし十八世紀の神秘家スエデンボリにつき調べたりしが、一夕、某縉紳の館にて開かれし夏至祭の晩會にて、其の女性より「貴男は、スエデンボリにつき調べたまふや。」と率爾に問はれたり。

其の灰綠色の瞳に金髪瘦身の中年女性は、流暢なる日本語にて余に此く語りき。

余は、此かる借問に、内面の狐疑の露出せぬやうに努めて溫容を保ちて、「否、余は日本思想史研究家にして、鈴木大拙につき考証する次第に、大拙が會て傾倒せしスエデンボリにたまさかの興味を持つに如かず。」と答へたり。よも、スエデンボリの特殊なる瞑想法を苦心探求する者とはえ言はざりけり。

而るに、彼女は、「毎週金曜日之夜、スエデンボリの瞑想法を研究する集ひあれば、若し、貴男の御都合宜しくば、此の住所へ來たまへかし。」と言ひて、銅板にて華文字を緻密に印刷したる名刺を余に通じたり。余は高深莫測なる彼女の瞳に、己が内心を察知さるることに悚然たれども、名刺を懇懇に交換して、握手し別れたり。

其の夏至の晩會は白夜の中に續き、余は幾人もの客と寒暄を叙しては乾杯し、火酒に揺々たる長き影法師を伴に家に歸りしは短夜も拂曉のことなりき。

其の名刺は、暫し余の研究室の手文庫中に放置さるるに、秋分も過ぎたる金曜日、誘はるるが如く吾が手に触れぬ。余の研究室よりは、昔王侯の狩場たりし苑園を望み、熹微なる秋の日に愈々黝き湖水に感傷せるにや、彼女の住居を訪なはむと思ひ立ち、大學前驛より地下鐵に乗りたり。

はや初更も過ぎ、街燈の下、余は Förläningsgatan 13 と名刺に記されたる住所を頼りに、地下鐵の終點驛より北に入る小巷の番地を數へつつ歩みたり。フエルリイクニングス街とは會て聞きし事とて無けれども、不思議に難なく場所を見附くるに、門扉の重き鐵環を鳴らすや、彼女は門口に身を現はしたり。

「待ち奉れり。疾く入り給へ。」

此の都市獨特なる十九世紀中葉風の北歐新古典派的の建物に入り、ゴットランド石灰岩の階段を上るに、針葉樹の床板を寄木細工の如く張り巡らせ雅趣乏しからぬ會議室に案内されたり。室内には北歐式の樸實なる椅子を円陣に組み、數名の男女既にこれに座したり。

余は傍觀者として、円陣の外の椅子に座し、様子を打ち眺めたり。彼女が講頭を務むる此の降靈會は、十九世紀式の円陣なりしが、獨特なる工夫は、一枚の二桁數字の亂數表を手交され、數字一箇を順に円陣の時計回りに、過誤の生ぜざるやうに注意力を繼續して各人讀誦するにあり。

此の亂數表は、フォリオ版の稀觀書の複印の如く、或る貴人の秘笈の中より見出したる物の趣なり。スエデンボリは亦、不世出の數學者たるに、渠自身、計算數唱の反復により自然に眞言効果生じ、一種の禪定に入りたりと會（うる）せば此れも一理ならむ。

半時の數唱の後、一同沈黙し、各自輕き瞑想に入れり。然れど、此くのみにては、數字散亂し大拙の提唱せる座禪の數息より、えやは深まらむ。されば、スエデンボリを去れる大拙は渠を堪破したる者ならむ。

かく思ふに、余は、無聊の餘り、勝手次第に不覺にも 沈（こんぢん）せしが、突如眼前に彼女現はれ、「貴男は此の瞑想法を疑へり。」と大喝し、掌聲一拍を爲したり。

氣が付くに、余は地下鐵の車中の堅き座席にて転寢を爲したり。「市營乗合自動車16、70番、路面電車20：番は乗り換へ。」と繰り返す機械音聲の車内放送を遠く聞きて、余は再び地下鐵の終點に到着したるを知りぬ。

余は悵然と下車し、北歐の秋特有の冷たき驟雨の中を整礎しうせいを踏みて彷徨へるものの、フェルリイクニングス街十三號に辿り着く由とてなきことは、言ふもまたおろかなりけり。

（平成二十八年十一月三十日受附）